魔女が使えないたった一つの魔法

柳南

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

http://www.akatsuki-novels.com/

注意事項

このＰＤＦファイルは「暁～小説投稿サイト～」で掲載中の小説を「暁～小説投稿サイト～」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁～小説投稿サイト～」を運営する肥前のポチに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女が使えないたった一つの魔法

【作者名】

柳南

【あらすじ】

オリジナルですが、色んな物に影響されて書いてるので似てしまうところがあったりするかもしれません。

１話は短く、更新速度はわかりません。

行き当たりばったりなので途中でリタイアするかもです。

【参考にしてる作品】

異世界に救世主として喚ばれましたが、アラサーには無理なのでひっそりブックカフェ始めました。

不死鳥（ＳＥＫＡＩ　ＮＯ　ＯＷＡＲＩ）

1・異世界

紗夜が目を覚ますと真っ白いだけの空間が広がっていた。おかしい、さっきまで楽しみにしていた本を読んでたはずなのに。

「…え？」

「夢、かな？」

いつの間にか寝てしまったのだろうか？まぁ、そうだろう。１０連勤明けに寝ないで本を読もうとしたのだから。

（…夢であって欲しい、夢であれ夢であれ夢であれ…）

「夢ではないぞ？」

（ん？声？夢じゃないって？まさか～。あははは…）

「意識はあるのか…？おい、お主。」

（あぁ、なんか言ってるなぁ。あ、この人顔整ってるー。すごいイケメンだー……って！！）

「夢じゃない？！」

紗夜はかなり遅れたタイミングで驚いた。その様子に男は驚いたようだった。

「驚かすでない…まったく…。我は神。お主は異世界で救世主となる者に選ばれたのだ！！では、異世界転生の心得を……」

ん？異世界？

「えええぇ？！？！」
紗夜は驚いて再度大声を上げた。またしても不意をつかれた男は肩を跳ね上がらせて驚いた。

「大声を出すなと言っておるじゃろうが！！心臓に悪いんじゃ！！」
「自分だって大声上げてるじゃん！！てかそうじゃなくて、どういうこと？！神？！異世界？！」
「ん？おお、そうじゃ。お前は選ばれし者として異世界に転生してもらうことになった。」
数秒の沈黙の後、紗夜は言い放った。

「え、無理です。え、無理無理。返して。元の世界に。」
その様子にたじろぐ神。
「え？！なぜじゃ、ていうか、無理じゃ。」
「え？！なんで？！なんでなんで？！まだ本読んでないのに！！楽しみにとっといたのに！！なんてことするのよ！！」
紗夜は無理の一言にものすごいショックを受けた。せっかく楽しみにしていた本を読めると思ったのに。開いた瞬間眠りに落ちたから、記憶にあるのはほんの数行だけだ。
神とやらの襟首を掴んでぐわんぐわんと力任せに揺さぶった。

「あぁぁぁぁぁ待て待て揺さぶるなぁァァ！！」
神は慌てて言った。どうやら神様は三半規管が弱いらしい。

「はぁ、はぁ、はぁ……」
揺らし疲れた紗夜と、揺らされ少々グロッキーな神のきれた息が空間にこだました。

「お…落ち着いたか？それでは話の続きを…」
神はこちらを伺うような声で話を戻そうとしたが、紗夜は逃がさなかった。
「ねぇまって。」
「なんじゃ…」
紗夜の声に神はビクリと反応した。また揺さぶられると思ったのか身構えている。そんなことお構い無しに紗夜は続けた。

「ねぇ、私、いやよ。勇者とかそういうの。」
神はキョトンとした顔をして、言葉を理解したのかホッと安堵した。

「私、人と関わりたくないの。そんなあからさまに人と関わりそうなものになんてならないわよ。むしろ辺境の地に住まう変人でいいわ、行くしかないのなら。」
その言葉に神は少し慌てて言った。

「待て待て、わしは勇者とかになって欲しいなんて言っとらんぞ？」
紗夜は意味が分からないというような顔をした。

「え？だってそういうもんでしょ？異世界転生って。」
神は一呼吸してから、真剣な表情をして言った。

「いや、お主には魔女になって欲しいのじゃ。」

2．魔女

「え？魔女？」
紗夜はキョトンとした。現世での異世界転生モノって言ったら勇者か聖女かそんなのだったのに。

「そう。魔女じゃ。お主が行く世界には、魔法や剣で戦うとか、まぁ、ゲームみたいな世界なんじゃが、最近1つ問題が発生しての。その問題というのが…魔女が1人辞めてしまったんじゃ。」
えぇ、魔女って辞めれるんだ、辞表とか書くのかな？とぼんやり思っていたのだが一つ疑問に思った。

「え？何が問題なの？」
神はまぁ待て、という仕草をして続けた。

「お主が行く世界は、元いた所で言うなら中世ヨーロッパって所じゃな。街並みや庶民はもちろん、王政など結構それに近い。だが発展しているのは化学ではなく魔法。その世界にはいくつか国があるのじゃが、お主にはその中でも小さめの国のヴェルデールという国に行ってもらいたいのじゃ。」
神はどこからともなく地図を出して指を指した。

「そこは資源も豊富で、食べ物も美味しいし、景色も綺麗。安全で人気国なのじゃ。メインストリート沿いにとある料理屋があってな、特にそこの……」
そこまで言って、神は話が脱線していることに気づき頬を赤らめな

がら続けた。

「ま、まぁ、その、なんじゃ、ここからが本題でな。その国にはある特殊な結界が張られてての、それには魔女が5人必要なのじゃ。5人の魔力を使い、星型の頂点になるように存在する事で国を囲んで結界を張るのじゃが、前代の魔女がもう嫌だと言って職務放棄をしたのじゃ…。」

紗夜はぼんやりと魔女って職務放棄出来るのね…と思っていた。

それを見透かしたように神は言った。

「なんだ、大したことないなどでも思っておるのじゃろう。」

紗夜は見透かされて驚いた。

神はより真剣な眼差しで続けた。

「これだけ聞けば大したことは無い魔女のボイコットなんじゃが、このままじゃ本当に大変なことになるのじゃ。

さっき、ヴェルデールは小さな国で結界を張っていると言ったじゃろう。」

紗夜は真剣な眼差しに少し強ばりながらも頷いた。

「小さな国というのはいつでも周りの大国に狙われておる。普段は結界があるから侵入できないのだが、それが無いと知られたらどうなるか、わかるじゃろう？」

紗夜は歴史の授業で習った太平洋戦争を思い出していた。攻撃の方法などは違うとはいえそれに匹敵、またはそれ以上の大戦争が起こることは安易に予想出来た。

神は頷いた。

「まだ、隣国へは結界が張られていないことは知られていないのだ。結界は見えないからな。だからこそ、今すぐに魔女を連れてきて結界を張り直す事が必要だったのじゃ。そして、白羽の矢が立ったのがお主だったという訳じゃ。特にすることは無いし、必要なものはいくらでも用意させよう。ただ星型の頂点付近で生活してくれていたら良いのじゃ。人は全くと言っていいほど来ない辺境で、家も手配させよう。魔女になってはくれぬだろうか」

下を向いた神に、紗夜はため息をひとつ着いて言った。

「まぁ、そのくらいならいいけど…。でも、ほんとに何もしないよ？」

その瞬間、神の瞳は輝きを取り戻した。

「良かった！！それならさっそく…」

「まった！！」

神は首を傾げる。紗夜は真剣な顔で言った。

「その代わり、お願い、きいてくれるよね？」

3．お願い

「お願い?とは?まぁ、酷いものでなければ叶えるが…」
神はより深く首を傾げて言った。
紗夜はその言葉に頷いて続けた。

「お願いというか、能力?スキル?まぁ、そんな所かな、いくつか欲しいものとか知りたいことがあるの。」
神はあぁ、と気づいた顔をして、許可を出した。
紗夜は少し考えてから言った。

「えー…っと、まずはまぁ、基本知識の事ね。言葉とお金のことと、あと国同士の事とか歴史とかの知識が欲しい。
それから、魔法をいくつか覚えておきたいかな。そうね…個人用の結界魔法と、治癒魔法はすぐ使えたら嬉しい。
あと、本!!元いた世界の本と、ここの世界の本と、たくさん欲しい。それから楽器ね。ピアノと、ハープと……」

「ち、ちょっと待ってくれ…多いな…覚えられん…それならこれをやるから必要なものはこれから出してくれ。家とかも何でも出るから……。」
神はそう言って、水晶玉のようなものを渡してきた。紗夜はありがたく受けとった。

「じゃあ、お願い終わったし、そろそろ。」
神は右手を空にかざしてゲートを開いた。

紗夜が向かおうとすると、神はひとつ思い出したと言って慌てて紗夜に聞いた。

「大事なことを忘れていた。魔女は不老不死なのじゃ。そのせいで前代の魔女は嫌になってしまった様なのじゃが…」

神は不安そうに聞く。紗夜が今からでも断ってしまうのでは無いかという顔をしている。

「そう、なら見た目は１９歳ぐらいの美少女にしておいて。」

紗夜の意外な切り返しに神は驚いた顔をしていた。

紗夜はニコッと笑って、ゲートをくぐった。

4・お家

「ん、ぅ…」

ゲートをくぐった紗夜は、白く強い光に包まれ目が眩んだ。

力いっぱい目をつぶり、腕で目を保護した。

スっと光が消え、ガラスが砕け散るような繊細な音に囲まれた紗夜は恐る恐る目を開いた。

「わ……すご……」

紗夜の前には、森の中の少し開けた広場があった。

人通りのなさそうな森の奥。視界の先には小さく王宮が見える。

「え、良さげじゃない？ひっそりまったりライフにピッタリ！！」

さっそく紗夜は水晶玉を取りだし、願った。

（えー、二階建て屋根裏部屋つきでアンティーク風のお家を1件！）

すると、水晶にいくつかの候補が映った。

「え、と？これってどうやって選べばいいのかな？」

スマホのように人差し指を使ってスライドすると、次のページが映った。

「あ、これいいかも…」

紗夜が目をつけたのは、白い壁とレンガの屋根、可愛らしい木の扉と小さな窓の着いた家だった。壁の筋交いもいい雰囲気を醸し出している。

「じゃ、これで」
水晶玉をタップすると開けた広場の中心に、水晶玉に映っていた家がエフェクトとともに現れた。

紗夜はドアを開けて中へ踏み込んだ。
小さな窓ばかりだと思っていたが、家の裏には大きな窓とベランダ、出窓も着いていて、更には天窓と吹き抜けもありとても明るく綺麗な家だった。

「よしっ、次は…」
紗夜は家具、小物などを次から次へと出現させた。

「こんなもんかな。」
紗夜は一息ついて見回した。我ながらいい出来だ。
1階は、2部屋に分け、出窓や大きな窓とベランダがある方を住居スペースに。最低限の広さだけを使い1人用のダイニングテーブルとイス、キッチンや現代で言う冷蔵庫の役割を果たすものなどを置いた。また、その近くには温泉をひいたお風呂など水周りも完備させた。
もう1部屋は、本のスペース。ハードカバーの物語本を主に置いていて、人がすれ違えるだけのスペースの通路を開け、本棚を綺麗に並べた。まるで図書館のようだ。
その部屋の片隅、縦長の小窓のある所には壁に沿ったL字ソファーとミニテーブルを。ここでくつろぎながら本が読めるようになった。

「次は2階ね。」
紗夜は目を輝かせながら階段をかけていった。

5．屋根裏部屋

紗夜は、2階の一部屋を寝室兼勉強部屋とした。
またここにも本棚がずらりと並び、ベッドとテーブル以外の場所は大抵本棚に埋められている。
しかし、ここに入れられるのは物語本ではなく魔法の教則本、つまり魔導書だ。まだ1冊も入ってないとはいえ、これから長い人生…いや魔女生？いくらスペースがあっても問題ないだろう。、
吹き抜けの分、1階よりは狭いものの十分な広さだ。
もう一部屋は、楽器を沢山置く部屋にした。
ハープ、ホルン、ピアノ…。思いつく楽器はなんでも揃えて
2階も図書館のような本棚の配置にして、上に目をやった。

「次は屋根裏部屋ね。」
紗夜がこの家に決めた一番の理由。それは屋根裏部屋がある事だった。秘密基地のようにこじんまりとした空間。天窓からは星だって眺められる。

「ここはもちろん、これを置かなくちゃ。」
屋根裏部屋にふわふわのセンターラグと居心地よすぎて人をダメにすると評判の大きなビーズクッションを置いて、そのまわりをぐるっと背の低めな本棚で囲った。天窓以外の窓も付いているため、明るく開放的な部屋。そこで読むのは、元いた世界の本、主に漫画やラノベなどだ。

6．魔法

ふかふかのクッションに身を包まれ、数分の穏やかな時が流れた。

「すごくいい…けど、維持とか絶対大変だよね…。魔法とかで何とかならないのかな？」

紗夜は掃除や生活に関する魔法の本、つまり魔導書を水晶玉で検索した。

「これにしようかな…。記念すべき魔導書1冊目！！」

出てきた本を早速開くと、目次にズラっと日常魔法が並べられていた。

「えー、掃除…そうじ…。これかな？」

目次に書かれたページを開くと魔法陣と呪文が書いてあった。試しに【家を綺麗に保つ魔法】をかけてみることにした。

「えーと？発動対象に魔法陣を描きます…？てことは、床とか？消えるもので描きたいけど……。」

悩んだ末、チョークに決めて水晶玉で白色チョークを出した。

「え？なんか…昔より描きやすくなってない？変な音ならないし、便利！！」

そんな些細なことに感動しながら、丁寧に魔法陣を書き写していった。

丸や三角など簡単な図形の集合体である魔法陣はすぐに描き終わった。

魔導書のページをみながら、呪文を唱えようとして、息を吸ったその瞬間、薄い青の光が紗夜の周りから家全体へと広がって消えた。
呪文を唱えようと空気を吸ったが、驚きすぎて吸い込みすぎてしまい、紗夜は酷く咳き込んだ。

「げほっ、げほっ…!!!……はぁ、何よ今の…咳き込んだせいで喉痛くなってきた…。」

1杯の水を出そうと水晶玉に手を伸ばした瞬間、目の前に大きな水滴、それもキンキンに冷えた物が現れた。
紗夜は慌てて水を掬おうとしたが、間に合わず床にこぼれてしまった。
すると、さっきかけた【家を綺麗に保つ魔法】が発動し、こぼれた水は瞬く間に乾き、こぼれて濡れたはずの床は水がこぼれた事実さえも否定したくなるほど綺麗に元通りになった。

「え、あ…魔法って凄い便利～……っじゃなくて!!何今の?!水出てきたんだけど?!」
紗夜は喉が痛くなったことも忘れて、水を出したと思われる自分の手のひらをまじまじと眺めていた。

7．魔女特性？

手のひらを眺めても大したことは分からなかったので、紗夜は別の魔法をかけてみることにした。
本が汚れないための魔法。
この家の敷地内に空調機能。
物が元の位置に戻る魔法。

いくつかかけてみた結果、わかったのは魔法陣を書くだけで魔法が使える（多分）ということ。
しかし、その後出した魔導書にもそんなことが出来るという記述は一切なかった。本来は魔法陣と呪文をワンセットにして1つの魔法を使うらしい。
それだけでも摩訶不思議だが、それだけなら「まぁ、魔女特性ってやつかな」と納得（？）出来るのだが、水を出した時だけは魔法陣すら書かなかった。その事があって、分かったことが（多分）というなんとも割り切れない形になってしまったのだった。

「ま…まぁ、いつか分かるでしょ…。」
考えすぎて疲れてしまった紗夜は、もう日が暮れることに気づいて夕食にすることにした。

「えー、簡単なの食べたいな…」
水晶玉で新鮮な野菜とパン、ハム、チーズ、マーガリンとマヨネーズを出し、慣れた手つきでサンドイッチを作った。
飲み物は温か甘々なミルクココアを作りイスに腰かけた。

ダイニングテーブルを置いたところは大きな吹き抜けになっていて、大きな天窓がついているので、空の色が変わっていくのが見られた。

「綺麗…。」

空は赤から青へ、そして黒へとグラデーションしながら、一瞬の速さで変わっていく。

空が暗くなった時、星の輝きが増した。

都会では見られない満点の星空。

それが紗夜に別世界に来たことを実感させた。

「お母さんに最期、会ってないな…。」

口に出した瞬間、もう会えないことを自覚して涙が頬をつたった。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~24598

魔女が使えないたった一つの魔法
2020年05月31日　00時37分発行